

### 34.Sensitive AgNOR染色法を用いた唾液腺腫瘍の悪性度の検討(一般講演)(東日本歯学会第14回学術大会(平成8年度総会))

著者名(日)	大内 知之, 矢上 了子, 小山 宏樹, 三科 卓見, 長江 俊一, 芳賀 宏, 荒井 滋朗, 中出 修, 安彦 善裕, 賀来 亨
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	15
号	1
ページ	55
発行年	1996-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00008149/">http://id.nii.ac.jp/1145/00008149/</a>

各種濃度のエピネフリン添加で得られた相対信号強度は、DMPO-OHならびにDMPO-Hともに、 $21\mu\text{M}$ を越えたとわずかながら信号強度の上昇を認めた。

塩酸キシロカインの濃度を2%で一定をし、エピネフリンの濃度のみを、変化させると、 $10.0\mu\text{M}$ 添加から $70.0$

$\mu\text{M}$ 添加では、DMPO-OHならびにDMPO-Hの信号強度が指数関数的に低下し、DMPO-OR信号強度が著しく増大していることが確認された。これは、HOラジカルならびにHラジカルから、アルコシルラジカル( $\text{RO}\cdot$ )に変化していることを示した。

#### 34. Sensitive AgNOR染色法を用いた唾液腺腫瘍の悪性度の検討

大内 知之, 矢上 了子, 小山 宏樹,  
三科 卓見, 長江 俊一, 芳賀 宏,  
荒井 滋朗, 中出 修, 安彦 善裕,  
賀来 亨  
(口腔病理学講座)

【緒言】 One-step法の開発・改良以来、AgNOR染色法は、各種腫瘍性病変の増殖能および予後の評価などに応用すべく、広く研究がなされている。現在までにAgNOR数はribosamol transcriptional activityを反映し、各種細胞増殖能マーカーと相関関係にあること等が明らかにされていますが、その染色法や判定基準についてはいまだ様々な提案や報告がなされています。昨年、Yekelerらによって提唱されたSensitive staining (SS法)は、高感度にAgNORドットを識別することが可能とされています。そこで今回われわれは、唾液腺腫瘍の中でも悪性度の異なるとされるpleomorphic adenoma (PA)、polymorphous low-grade adenocarcinoma (PLGA)およびadenoidcystic carcinoma (ACC)の組織切片への応用を試み、従来法と比較し、SS法の有用性を比較検討しました。また、1991年に改訂されたWHOの唾液腺腫瘍の分類で新たに記載され、増殖能等に関する報告の少ないPLGAを中心とした唾液腺腫瘍の悪性度との関連につい

でも検討した。

【方法】 従来法はPlotonやCrockerらの方法を改良して行ない、SS法は、Yekeler et al. (J Pathology, 175:449. 1995)の方法で行なった。

【結果および考察】 細胞1個あたりのAgNOR数は、PAで従来法 $1.45\pm 0.12$ 、SS法 $1.53\pm 0.02$ 。PLGAでは各組織パターン間での差はなく、従来法 $1.78\pm 0.94$ 、SS法で、 $1.87\pm 0.13$ 。ACCで従来法 $2.08\pm 0.05$ 、SS法で $2.28\pm 0.11$ でした。従来法とSS法の間有意は認められなかったものの、いずれもSS法が若干大きな値を示していました。これは、SS法が従来法に比してバックとドットのコントラストが鮮明であり、特に小顆粒状ドットを正確に識別することができるためと思われた。また、検索した症例数が少ないものの、PLGAとPAおよびACCとの間には、比較的大きな差を認め、悪性腫瘍の中では予後の良好なPLGAの悪性度の傾向を示唆するものでした。

#### 35. 咀嚼動態の変化が高週齢ラットの中枢神経系へ及ぼす影響

○寺澤 秀朗<sup>1)</sup>, 池田 和博<sup>1)</sup>, 平井 敏博<sup>1)</sup>,  
矢嶋 俊彦<sup>2)</sup>  
(<sup>1)</sup>歯科補綴学第一講座<sup>1)</sup>, <sup>2)</sup>口腔解剖学第一講座)

【はじめに】 高齢者が「健やかな高齢期」を過ごすためには、咀嚼機能の維持が不可欠である。しかし、高齢者においては、顎口腔系組織・器官の生理的老化によって咀嚼機能は低下し、さらに、歯の喪失によって顎口腔系のみならず全身の病的老化が進行し、咀嚼機能の低下に拍車がかげられることが考えられる。そこで、加齢や

老年痴呆などにおいて合成能の低下傾向が報告されているアセチルコリンに着目し、咀嚼動態の変化が中枢神経系に及ぼす影響について検討した。

【方法と材料】 実験には、Wister系雄性ラット18匹を用い、25週齢の時点で対象群、粉末飼料群、臼歯切除群の3群を設定した。40週齢時において4%パラフォルム